

微小胆石症

Microolithiasis of the gallbladder:
D Houssin, D Castaing, et al (Sur-
gery, Gynecology & Obstetrics 157:
20-24, 1983)

微小胆石症とは一般に径 3 mm 以
下の結石が胆嚢内に存在すること
と定義される。小さいために発見が難
しく X 線、超音波で結石を確認でき
ない場合は診断上問題となり、ま
た、結石が移動して急性膵炎を惹起
する懸念があり治療上も重要な問題
となる。著者らは微小胆石症の頻
度、臨床経過を径 3 mm 以上の胆
石症と比較して対策を検討した。対
象は手術または剖検で結石の個数と
性状を確認できた 731 例であった。
サイズの揃ったのは 503 例で、微小
胆石症 68 例、径 3 mm 以上の胆石
症 435 例 (3~10 mm 131 例、10~

20 mm 151 例、20 mm 以上 153 例)
であった。サイズの揃ったのは
228 例で、1 つでも径 3 mm 以下の
胆石が混在する場合を微小胆石症と
すると、その数は 102 例で、全体に
占める微小胆石症の頻度は約 23%
(171/731 例) であった。

以下の検討をサイズの揃った胆石
症についてのみに行くと、微小胆石症
のうち無症状は 16 例 (23.5%)、右
季肋部痛 32 例 (47%)、合併症のた
めに入院したのは 20 例 (29.5%) で
あった。合併症の内訳は急性膵炎 15
例 (浮腫性膵炎 10 例、部分的壊死性
膵炎 5 例)、黄疸 2 例、急性胆嚢炎
2 例、急性胆管炎 1 例であった。微
小胆石症における急性膵炎の合併頻
度は 22% で、径 3 mm 以上の胆石
症の場合の 2.8% に比し圧倒的に高
かった。一方、他の合併症は逆に微
小胆石症で少なかった。胆管結石の

合併頻度は合併症を起こした症例に
おいてのみ、微小胆石症と径 3 mm
以上の胆石症との間に差を認め前者
が 23.5%、後者が 65% であった。

微小胆石症に急性膵炎の合併率が
高いのは径約 4 mm の胆嚢管と径
2±1 mm のオッジ括約筋を通過し
うる結石のサイズに関連があると思
えられる。この事実は微小胆石症の
場合たとえ無症状であっても明確な
治療方針で臨む必要があることを示
す。実際無症状胆石症の治療は議論
の多い領域であるが、微小胆石症の
患者は特に致命的な合併症の危険に
曝されているので、治療に伴うリス
クを考慮しつつ手術をはじめ確実な
治療手段を取るべきである。

(愛知県がんセンター第 1 内科

種広 健治 抄)